

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01587

研究課題名（和文）冷戦期における時間的・空間的想像力および生活空間の変容をめぐる比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study on the Transformation of Temporal and Spatial Imagination and Life Space during the Cold War Period

研究代表者

菅原 祥（Sugawara, Sho）

京都産業大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：80739409

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は20世紀、特に冷戦期に焦点を当て、そこにおける時間的・空間的想像力のあり方およびその変容を明らかにした。具体的には、冷戦期の東西両陣営の近代化プロセスにおいて何らかのイデオロギー的・ユートピア的な都市計画に沿って作り出された実際の生活空間そのもの（団地、居室空間、工業空間など）に着目し、それをめぐる記憶のあり方や、そうした空間をテーマとして創造されたフィクション（ユートピア、文学、映画、ゲーム等）を主な分析対象とした。研究においては代表者・分担者各自が各自の分担に従って「理論研究」「社会学的実証研究」「文学研究」のいずれかを個別に行い、成果を上げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀の時間的・空間的想像力の再検討という課題を、単に一国のみの地域研究ではなく、より広い世界史的視点から多角的に行うことができたのが本研究の大きな意義である。特に冷戦期の文化についてはさまざまな研究分野で再考が進んでおり、本研究はそうした近年の研究潮流に大きな貢献をなすものである。また、得られた研究成果の一部に関しては、『社会学雑誌』41号にて特集「空間と時間の文化的想像力」（仮）を組み、ある程度まとまった形で公表する予定であり（2024年予定）、今後この分野においてさらに多角的な観点から学際的なかたちで研究が展開していく上での重要な基礎研究を行うことができたと言える。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the nature of temporal and spatial imagination and its transformation in the 20th century, especially the Cold War period. The main subjects of analysis were the actual living spaces themselves (apartment complexes, living room spaces, industrial spaces, etc.) and the memories surrounding them, as well as fictions (utopias, literature, movies, games, etc.) created on the theme of such spaces. In the research, the project members individually conducted either “theoretical research,” “sociological empirical research,” or “literary study” in accordance with their assignments.

研究分野：社会学

キーワード：時間と空間 冷戦期 社会主義 団地 記憶 文学 ユートピア

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者の菅原は、これまで主にポーランドにおいて、社会主義体制下における「ユートピア的想像力」と社会主義体制崩壊後の現在における「ポスト・ユートピア的想像力」をめぐる研究に従事してきた。特に、ポーランドの社会主義時代の計画都市、ノヴァ・フータやティヒでの調査を通じて、社会主義時代のユートピア的プロジェクトにおいて抱かれた空間的想像力が、現実の都市環境およびそこで実際に生きた人々の生とどのようななかかわりを持つのかを考察しようと試みてきた(菅原 2013, 2018)。また、文化遺産論の観点から、社会主義体制崩壊後のポーランドにおいて、かつて社会主義時代に建設された都市環境が現在のポスト社会主義の現実の中で人々の想像力においてどのような意味を持っているのかを検討した(菅原 2017, 2018; Sugawara 2019)。

これらの研究に従事する中で大きな課題として立ち現れてきたのは、社会主義体制下に限らず、20世紀の東西における時間・空間に関わる想像力を比較研究することの必要性である。20世紀においては、一方ではアメリカに代表される西側ブロックにおける消費主義の資本主義的ユートピア的想像力と、他方ではソ連に代表される東側ブロックにおける「社会主義建設」のユートピア的想像力が互いに覇を競い合い、そこにおいてさまざまな居住空間、労働空間の編成、およびそれに伴う未来像の構想など、多様な時間的・空間的想像力が花開いたが、このように一見激しく対立していた東西の両陣営が、互いに合わせ鏡のごとく符合・共鳴しあう空間的想像力のあり方をそれぞれ独自に生み出していたという事実は注目に値する。例えば、原武史は日本の「団地」がポーランドなどの東欧圏の集合住宅と奇妙に似通っていることに注目しているし(原 2012)あるいはS・バック＝モースはソ連とアメリカの高層建築の間に見られる類似性に注意を促している(Buck-Morss 2000)。代表者の菅原も、東欧における社会主義時代の集合住宅の記憶と、日本における「団地」の記憶との間の比較研究を試み、一定の成果を挙げることができたが(菅原 2017; 2019)より広い視座から20世紀における「時間と空間」に関わる想像力の領域を比較研究することの必要性を感じていた。

「時間と空間」というテーマは近年の社会学において注目を集めているテーマのひとつであり、近代における抽象的で合理的な「近代的時間」および「近代的空間」の発明についてや、それとは異なるいわゆる伝統社会における時間意識・空間意識等については、すでに多くの研究蓄積がある(Adam 1990, 2010; 真木 1981; 鳥越 2015, 2019; Urry 1995, 2016)。しかし、社会学におけるこのような議論は、「近代的時間と空間」をめぐるマクロな枠組みや、政治・経済的な時間と空間の再編成については多くを明らかにしてくれるものの、他方、そもそも近代という時代において人間が過去・現在・未来をいかなる(間主観的な)リアリティとして認知・理解してきたか、空間はそれにどう関わってきたかという最も本質的な問題に関しては必ずしも正面から研究がなされてきたとは言いがたい。加えて、このような問題をさらに深く考えるためには従来の社会的探求のみではなく、それを人々が抱いている「未来」や「場所」に関する(フィクションも含めた)「想像力」のあり方やその可能性に関する人文科学的探求と組み合わせることが必要不可欠である。このような視点から本研究では、社会学における時間・空間研究を、文学・哲学研究などの人文科学的知と融合させることで、従来の社会科学的研究における時間と空間論の研究のさらなる深化を目指した。

## 2. 研究の目的

上記のような問題関心から、本研究は20世紀、特に冷戦期に焦点を当て、そこにおける時間的・空間的想像力のあり方、およびポスト冷戦期のネオリベリズムにおけるその変容をめぐって、社会学および文学研究の観点から学問領域横断的な研究を行った。東側の社会主義体制が崩壊して資本主義陣営が「勝利」してから既に30年が経った現在、これらかつての東西両陣営において育まれた時間的・空間的想像力のあり方やそれと関連するユートピア的想像力が、現在の時点から振り返ってどのような意味を持っていたのかを探求することが第一の目的である。

さらに、そのような研究課題に取り組むことを通じて、本研究は「社会的想像力」を「(文学的)想像力」と接続することを目指した。これが本研究の第二の目的である。本研究が文学(フィクション)に関わる想像力をとりわけ重視するのは、かつて「文芸社会学」を目指した作田啓一らが述べる通り、それが「社会学にとっての対象でも素材でもなく、あえていえば社会学にもましてある種の真実を伝えている、それゆえ稔りゆたかな議論の展開のためにはたえず立ちもどる必要のある、ひとつの源泉」(作田・富永編 1984)であるとみなすからだが、さらにこのことを本研究の目的に照らし合わせてより詳しく説明するとするならば、それは文学というものがひとりひとりの記憶や体験(小さなフィクション)への深い理解を可能にし、それを共同体のフィクション(大きなフィクション)の理解へと架橋する役割を果たすという意味で、従来の社会的探求のミッシングリンクを埋める可能性があると考えられるからである。本研究の課題である「時間と空間」に関して言えば、共同体の呈示するモニュメンタルな時空間を個人の微細な望郷の念やノスタルジア、場所への愛着などのパーソナルな枠組みで捉えなおすことはまさに文学だからできることなのである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究体制

本研究では具体的に 冷戦期の東西両陣営の近代化プロセスにおいて何らかのイデオロギー的・ユートピア的な都市計画に沿って作り出された実際の生活空間そのもの（都市計画、団地、ニュータウン、居室空間、工業空間など）とそれをめぐる時間（記憶）のあり方、そうした空間（場所）をテーマとして創造＝想像されたフィクション（ユートピア、文学、映画、ゲーム等）の二つを主な分析対象とした。加えて、それらを繋ぐ理論的視座の構築（哲学、社会学など）にも取り組んだ。そのため、本研究においては以下の通り研究メンバーが「理論研究」「社会的実証研究」「文学研究」のいずれかを個別に行い、それを共有する体制を取った。

資本主義 (アメリカ、日本)	第三世界 (メキシコ、中米)	社会主義 (旧ソ連、東欧)
安井大輔(台所空間の歴史の変遷) 櫻井悟史(戦後サラリーマンと団地・社宅) 番匠健一(農業地帯における空間編成) 阿部友香(研究協力者)(日本の居住空間) 島大吾(研究協力者)(「戦場」をめぐる冷戦的想像力)	佐々木祐(メキシコ・中米のナショナリズムと空間変容)	菅原祥(社会主義体制下の空間的想像力、社会主義団地、炭鉱住宅) 服部徹也(ゲームにおけるユートピア的想像力) 田中壮泰(東欧のユダヤ人居住地域をめぐる時間・空間的想像力)
↑		
3つの視座からの理論的研究		
佐野泰之 (現象学)	木村至聖 (文化遺産論)	金瑛(研究協力者) (集合的記憶論)

#### (2) 全体での研究活動

上記の分担に基づいた各自の研究と並行して、メンバー間で特に本研究のキーワードとなる「時間・空間的想像力」に関する基本的な理解を共有し、また各自の研究成果の共有をするために、定期的な研究会（「時間・空間と想像力」研究会）の場を設けた。これらの研究会においては、主に本科研のメンバーの研究成果の共有を目的としつつも、場合によっては外部の研究者を講演者として招聘することで、新たな知見の共有や研究交流にも努めた。また、本科研において文学が大きな比重を占めることから、これらの研究会の一部は菅原主催の時間・空間に関わる文学の読解を目的とした研究会である「トポフィクション研究会」の一環として開催した。

また、本科研においては本研究を遂行するにあたって特に重要と思われる「団地」をはじめとした共同住宅の経験に関して研究メンバー全体で現地調査を行うことを目指していた。研究期間がコロナ禍と重なったことから当初予定していた国内での現地調査は中止を余儀なくされたが、菅原のコーディネートによって分担者5名（佐々木、木村、番匠、安井、服部）が2024年3月にポーランドで現地調査を行い、製鉄団地ノヴァ・フータ地区、炭鉱団地ニキショヴィエツ、ギショヴィエツ、アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所、グダンスクの巨大団地プシモジェ地区等を視察し、東欧の冷戦期における居住・労働空間についての貴重な知見を得た。

### 4. 研究成果

本科研においては、研究メンバー各自が自らの研究を進めながら、それらを共有する体制を取った。以下、各メンバーの研究成果の概要を述べつつ、それらが全体の研究目的の中でどのように位置づけられるかを紹介する。

本研究のバックグラウンドをなす理論的研究を担ったのは、木村至聖、佐野泰之、金瑛（研究協力者）である。この中で木村は、自らがこれまで主な研究対象としてきた産業遺産・近代化遺産論の枠組みに立脚しつつ、そこから超え出るような次元を内包する「古墳」という対象に関して、アクター・ネットワーク・セオリー等の知見も踏まえて考察を行うことで、古墳という古代から残るモノが現在のさまざまなアクターの絡み合いの中でいかにして「遺産」として位置付けられていくかを検討した（木村 2021）。また佐野は、本科研のテーマのひとつである「文学」を人々の想像力の領域と接続するという課題の一環として、梅田卓夫の文章表現論に着目し、人々の想像力が「文章」というかたちで表出される契機を現象学的に検討した（佐野 2022）。協力者の金は、モーリス・アルヴァックスの記憶論の専門家であり、研究会の場においてアルヴァックスの記憶論と空間論の接点について詳細な講演をしていただいたほか（金 2021）、その後の一連の研究会の場においても記憶論の観点から有益なコメントをいただいた。

主に西側の資本主義圏における時間・空間的想像力について検討したのは安井大輔、番匠健一、櫻井悟史、服部徹也である。安井は、冷戦期を通じて東西のはざまに位置していたフィンランド

の家政学における「キッチン」の歴史をたどりつつ、そこにおける人々の空間的想像力のありかたの変容を検討した。番匠は、北海道東部を対象として、そこにおける住宅開発、農業機械化、反基地運動、農民運動、文学サークル運動などを多角的に分析することで、冷戦下における「道東」というトポスを鮮やかに描き出した（番匠 2022, 2023a, b, c）。櫻井は、山口瞳の「社用族批判」の言説を検討することで、戦後日本における団地・会社・盛り場をめぐる空間的想像力を磯村英一の「第三空間」論を手がかりとしながら論じた（櫻井 2022）。

メキシコ・中米など「第三世界」における時間・空間的想像力を扱った佐々木祐は、とりわけ冷戦の只中で社会主義国家建設に取り組んだ中米ニカラグアの文化運動、特に具体的な職場や居住地（barrio）という空間的場を基盤とした文化実践の取り組み「詩作ワークショップ」の検討を行った。そこでは、貧困と戦争で荒廃が進む「いまここ」と、新たな社会建設の先にあるはずの「ここではないどこか」が、切実な対比を示しながら文学的に表現されている。革命戦争とその後の内戦といった苛烈な社会的現実には制約されながら、そうではない時間と空間を共同的に構想する実践のありようを、具体的な作品の分析を通じて明らかにした（佐々木 2021, 2023）。

ロシア・東欧など「東側」における（に関わる）時間・空間的想像力について検討したのは田中壮泰、菅原祥、服部徹也である。ポーランド文学者の田中は、ロシア帝国領ウクライナで生まれ、1952年にスターリンによる粛清で死亡したイディッシュ語作家、ドヴィド・ベルゲルソンのベルリン滞在時代の作品に着目し、それをポグロム以後の経験を描いた「ウクライナ文学」として捉え返すことで、20世紀における東欧のユダヤ人社会の時間・空間的想像力を鮮やかに描いた（田中 2020, 2022）。日本文学者の服部は、当初は現代日本文学における団地・ニュータウンを検討する予定であったが、より挑戦的な試みとして現代ゲーム研究に研究対象を移し、2023年のゲーム「Atomic Heart」を論じることで現代におけるユートピア的想像力の変容を検討した（服部 2023）。

最後に、研究代表者の菅原は、ポーランドにおける居住空間をめぐる想像力を、第一次世界大戦以前のドイツ時代に建設された炭鉱住宅（カトヴィツェ市の炭鉱団地ニキショヴィエツとギショヴィエツ）の、社会主義時代から現在に至るまでの記憶をたどることで検討した。これは、それまで主に社会主義体制下において建設された住宅と社会主義崩壊後におけるその記憶のみに研究対象を限定していた菅原のそれまでの研究からさらに視野を広げ、社会主義到来以前の炭鉱の記憶から社会主義時代の記憶、さらに社会主義体制の崩壊と炭鉱の衰退に直面した現在の記憶、という、長い時間軸の中で検討することで、単なる社会主義時代の研究にとどまらない視野を獲得することに成功した。また、炭鉱住宅に関わる絵画や映画、ルポルタージュ文学などを多角的に検討することで、人々の想像力の領域における「炭鉱住宅」と現実の生活環境としての「炭鉱住宅」の間の交錯を検討することができた（菅原 2021a）。また菅原は、これと並行してかつてより研究対象としてきたポーランドの社会主義時代の「団地」についても研究を進め、特に映像文化における団地表象について成果を得ることができた。具体的には、ワルシャワのウルシヌフ団地をめぐる1980年代のテレビドラマにおける表象を研究対象とし、そこにおいて社会主義のユートピアの崩壊と新たな想像力の萌芽が見て取れることを指摘した（菅原 2023）。

こうしたポーランドを対象とした地域研究と並行して、菅原はまた文学的想像力と社会学的想像力の接続という本研究のもうひとつの課題にも取り組んだ。ここで特に菅原が着目したのが、社会学的想像力を文学的想像力と接続する上でのSF文学の重要性である。まず、「時間の社会学」をSF文学を通じて再検討する試みとして、アーシュラ・K・ル・グインの『所有せざる人々』を論じ、「他者の時間」を想像し、それを未来に向けたユートピア的想像力へと繋げていく上でのSF文学の可能性を論じた（菅原 2021b）。また、ポーランドのSF映画監督ピョートル・シュルキンについても検討を行い、シュルキンの一連のディストピアSF映画が当時のポーランド社会に対して持っていた社会批評の可能性を検討した（菅原 2022）。

本研究の以上のような研究成果によって、20世紀の時間的・空間的想像力の再検討という課題を、単に一国のみの地域研究ではなく、より広い世界史的視点から行うことができた。特に冷戦期の文化についてはさまざまな研究分野で再考が進んでおり、本研究はそうした近年の研究潮流に大きな貢献をなすものである。研究成果の一部に関しては、『社会学雑誌』41号にて特集「空間と時間の文化的想像力（仮）を組み、まとまった形で公表する予定である（2024年予定）。今後この分野において、さらに多角的・学際的な研究を展開していくことが期待される。

#### <引用文献>

- Adam, Barbara, 1990, *Time and Social Theory*, Cambridge: Polity. (=1997、『時間と社会理論』伊藤誓、磯山甚一訳、法政大学出版局。)
- 菅原祥, 2010, "History of the Future: Paradoxes and challenges," *Rethinking History*, 14(3): 361-378.
- 番匠健一、2022、「北海道総合開発と地域社会 根釧パイロットファームの再編と自衛隊基地の誘致」、足立芳宏編『農業開発の現代史』京都大学出版会、239-260。
- 菅原祥、2023a、「1960年代北海道東部矢白別演習場における自衛隊演習と農民運動」、『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』24、19-34
- 菅原祥、2023b、「道東地域における望郷と故郷の創造 北海道中標津町の地域誌『北のふるさと』から」、『立命館文学』681、2023年3月、pp.1-23。

- 、2023c、「冷戦下の境界とユートピア 北海道東部における文学・農民運動・コミュニティ」(口頭発表) 第6回「時間・空間と想像力」研究会、2023年7月28日、於：京都産業大学 町家 学びテラス・西陣。
- Buck-Morss, Susan, 2000, *Dreamworld and Catastrophe : The Passing of Mass Utopia in East and West*, Cambridge: MIT Press. (=2008、堀江則雄訳『夢の世界とカタストロフィ 東西における大衆ユートピアの消滅』岩波書店。)
- 原武史、2012、『団地の空間政治学』NHK出版。
- 服部徹也、2023、「ユートピアの掌握 『Atomic Heart』(2023)を中心に」(口頭発表) 第6回「時間・空間と想像力」研究会、2023年7月28日、於：京都産業大学 町家 学びテラス・西陣。
- 木村至聖、2021、「古墳のトポスの多面性とヘリテージ」(口頭発表) 第4回「時間・空間と想像力」研究会、2021年12月19日、於：立命館大学衣笠キャンパス。
- 金瑛、2021、「集合的記憶論と空間論の接点 アルヴァックスを中心に」(口頭発表) 第2回「時間・空間と想像力」研究会、2021年3月22日、オンライン開催。
- 真木悠介、[1981] 1997、『時間の比較社会学』岩波書店。
- 佐野泰之、2022、「梅田卓夫の文章表現論」(口頭発表) 第5回「時間・空間と想像力」研究会、2022年12月10日、於：京都産業大学むすびわざ館。
- 櫻井悟史、2022、「団地・会社・盛り場をめぐる時間的・空間的想像力 山口瞳の社用族批判を手がかりに」(口頭発表) 第5回「時間・空間と想像力」研究会、2022年12月10日、於：京都産業大学むすびわざ館。
- 佐々木祐、2021、「『詩人のくに』の革命と詩学：1980年代ニカラグア“Nicaragua”誌をめぐる」松田素二他編『日常の実践の社会人間学：都市・抵抗・共同性』山代印刷株式会社出版部、189-203。
- 、2023、「『新しい人間』の詩学：80年代ニカラグア『ポエシア・リブレ』と『ニカラウアック』」『思想』1187、180-193。
- 作田啓一、富永茂樹(編) 1984、『自尊と懷疑 文芸社会学をめざして』筑摩書房。
- 菅原祥、2013、「ポスト社会主義期における社会主義的『ユートピア』の記憶と現在 ポーランド、ノヴァ・フータ地区を事例として」『社会学評論』64(1)、20-36。
- 、2017、「『社会主義の計画都市』の現在と過去の記憶 ポーランド、ティヒ市の調査から」『開智国際大学紀要』16、19-32。
- 、2018、『ユートピアの記憶と今：映画・都市・ポスト社会主義』京都大学学術出版会。
- 、2019、「団地ノスタルジアのゆくえ 安部公房と柴崎友香の作品を手がかりとして」『京都産業大学論集 社会科学系列』36、75-102。
- 、2021a、「産炭地をめぐる記憶と表象 ポーランドの炭鉱住宅ニキショヴィエツとギショヴィエツをめぐる」『京都産業大学論集 人文科学系列』54、241-272。
- 、2021b、「『社会学的テキスト』としてのSF文学の可能性 『時間の社会学』の観点から読む『所有せざる人々』」『京都産業大学論集 社会科学系列』38、75-96。
- 、2022、「ピョートル・シュルキンの ディストピア四部作 外部への脱出を求めて」『スラヴ学論集』25、49-61。
- 、2023、「団地ドラマはユートピアの夢を見るか？ ポーランドのコメディ・ドラマ『オルタナティヴ4』を中心に」(口頭発表) オンライン・シンポジウム「各国映像メディアにおける団地表象の比較研究」、2023年3月11日、オンライン開催。
- Sugawara, Sho, 2019, „Pamięć o socjalizmie i zabytki socjalizmu. Ochrona zabytków PRL w Tychach”, *Studia Krytyczne* 8.
- 田中壮泰、2020、「居留民の文学—1920年代の東欧とドイツを中心に」(口頭発表) 第1回「時間・空間と想像力」研究会、2020年11月21日、オンライン開催。
- 、2022、「イディッシュ語で書かれたウクライナ文学 ドヴィド・ベルゲルソンとポグロム以後の経験」『スラヴ学論集』25、63-82。
- 鳥越信吾、2015、「時間の社会学の展開 『近代的時間』観をめぐる」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究』第79号：83-97。
- 、2019、「近代的時間と社会学的認識」『日仏社会学年報』第30号：17-33。
- Urry, John, 1995, *Consuming Places*, Oxford: Taylor & Francis. (=2012、『場所を消費する(新装版)』吉原直樹監訳、法政大学出版局。)
- 、2016, *What is the Future?* Cambridge: Polity. (=2019、吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美訳『未来像 の未来：未来の予測と創造の社会学』作品社。)
- 安井大輔、2023、「モダンキッチンの歴史にみるフィンランドの生活空間の変容」(口頭発表) 第7回「時間・空間と想像力」研究会、2023年12月10日、於：京都産業大学 町家 学びテラス・西陣。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 16件）

1. 著者名 佐野 泰之	4. 巻 27
2. 論文標題 意識の沈黙と言語のざわめき	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 メルロ = ポンティ研究	6. 最初と最後の頁 39-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14937/merleaujp.27.39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 佐野 泰之	4. 巻 39
2. 論文標題 フェミニスト現象学における還元的位置づけ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 服部徹也	4. 巻 98
2. 論文標題 木下利玄による受講ノート 夏目漱石『文学評論』講義の翻刻と解題 (3) アイルランド文芸復興と写生文	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文学論藻	6. 最初と最後の頁 17-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菅原祥	4. 巻 25
2. 論文標題 ピョートル・シュルキンの ディストピア四部作 外部への脱出を求めて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 スラヴ学論集	6. 最初と最後の頁 49-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中壮泰	4. 巻 25
2. 論文標題 イディッシュ語で書かれたウクライナ文学 ドヴィド・ベルゲルソンとボグロム以後の経験	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 スラヴ学論集	6. 最初と最後の頁 63-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中壮泰	4. 巻 34(2)
2. 論文標題 どこに転がっていくの、林檎ちゃん : ロシア内戦時代の革命ソングとその文化的越境をめぐる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 155-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/00018021	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中壮泰	4. 巻 26
2. 論文標題 書評 井上暁子『語りの断層 : ドイツ=ポーランド国境地帯の文学』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 スラヴ学論集	6. 最初と最後の頁 128-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安井大輔	4. 巻 88(4)
2. 論文標題 食を通じた異文化理解と多文化共生の課題と可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊 農業と経済	6. 最初と最後の頁 143-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐々木祐	4. 巻 1187
2. 論文標題 「新しい人間」の詩学 80年代ニカラグア『ポエシア・リブレ』と『ニカラウアック』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 180-193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 番匠健一	4. 巻 24
2. 論文標題 1960年代北海道東部矢白別演習場における自衛隊演習と農民運動	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館大学国際平和ミュージアム紀要	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 番匠健一	4. 巻 681
2. 論文標題 道東地域における望郷と故郷の創造 北海道中標津町の地域誌『北のふるさと』から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原祥	4. 巻 55号
2. 論文標題 収容所の過去を再解釈ということ 『バサジェルカ』映画版と小説版をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『京都産業大学論集 人文科学系列』	6. 最初と最後の頁 91-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 服部徹也	4. 巻 96号
2. 論文標題 木下利玄による受講ノート 夏目漱石 『文学評論』講義の翻刻と解題(2) ダニエル・デフォー論と 写生文家のリアリズム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『文学論藻』	6. 最初と最後の頁 114-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安井大輔	4. 巻 6号
2. 論文標題 モノ・場所・人から考える嗜好品研究のこれから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『嗜好品文化研究』	6. 最初と最後の頁 126-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安井大輔, PARK Sara	4. 巻 7号
2. 論文標題 食科学研究・教育のかたちを探るための読書案内 フードスタディーズ・日本食研究の教科書・論文集紹介	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『立命館食科学研究』	6. 最初と最後の頁 297-308
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原祥	4. 巻 54号
2. 論文標題 産炭地をめぐる記憶と表象 ポーランドの炭鉱住宅ニキショヴィエツとギショヴィエツをめぐるって」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都産業大学論集 人文科学系列	6. 最初と最後の頁 241-272
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原祥	4. 巻 38号
2. 論文標題 「社会学的テキスト」としてのSF文学の可能性 「時間の社会学」の観点から読む『所有せざる人々』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都産業大学論集 社会科学系列	6. 最初と最後の頁 75-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安井大輔	4. 巻 65巻3号
2. 論文標題 食選択と社会に働きかける活動 国産食品とオーガニック食品の購入をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安井大輔	4. 巻 718号
2. 論文標題 東京圏における地域格差 産業・職業・意識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本労働研究雑誌	6. 最初と最後の頁 40-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 番匠健一	4. 巻 24号
2. 論文標題 境界領域における「移民」と「植民」 近現代北海道史からの視点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 番匠健一	4. 巻 4号
2. 論文標題 入植と離散の文学サークル運動 境界地域としての北海道東部	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生存学研究	6. 最初と最後の頁 61-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計41件(うち招待講演 4件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 死者の声を聴く場所としての「森」 現代ポーランド文学の事例から
3. 学会等名 シンポジウム「スラヴ文学の「森」：環境批評の視点から」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中壮泰
2. 発表標題 第4章「抵抗を識別する」を読む
3. 学会等名 第12回臨床哲学フォーラム「キャロル・ギリガンとケアの倫理」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小西真理子、田中壮泰
2. 発表標題 『アンネの日記』最後の日記から 80年 喪われたアンネの声を回復する
3. 学会等名 『抵抗への参加』刊行記念イベント、於・MARUZEN&ジュンク堂書店池袋店
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小西真理子、田中壮泰
2. 発表標題 鼎談「ケアの倫理は人間の倫理である」
3. 学会等名 『抵抗への参加』刊行記念イベント、於・MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 藤原辰史、安井大輔
2. 発表標題 激動する私たちの食を考える：フードテックと大学
3. 学会等名 2023年度あるきはじめる大学
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Daisuke Yasui
2. 発表標題 [Distributed Paper]Daisuke Yasui, "Food Consumption and Social Activities : On the Purchase of Ethical Food
3. 学会等名 XX ISA World Congress of Sociology, (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安井大輔
2. 発表標題 台所からみた近代の多様性：冷戦期のキッチンを紹介してみる生活空間の変容
3. 学会等名 第96回日本社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安井大輔
2. 発表標題 持続可能な食農システムをめざすフィンランドの地域食政策と諸実践
3. 学会等名 日本村落研究学会東海関西地区研究会・第50回関西若手ルーラル研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安井大輔
2. 発表標題 モダンキッチンの歴史にみるフィンランドの生活空間の変容
3. 学会等名 第7回「時間・空間と想像力」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shisei Kimura
2. 発表標題 Industrial Heritages in Postcolonial East Asia: A Comparison of "Heritagization" Processes
3. 学会等名 Post/colonial Heritage in East Asia and Beyond- Conflict, Remembering and Peacebuilding (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 木村至聖
2. 発表標題 文化遺産と記憶の社会学
3. 学会等名 経営史学会 No.59 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 木村至聖
2. 発表標題 “ Absent Heritage ”としての軍艦島？ ヘリテージ化の未来
3. 学会等名 金沢大学ワークショップ 文化と記憶の継承とその行方（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 木村至聖
2. 発表標題 多元的社会における構築主義
3. 学会等名 医療コンフリクト・マネジメント学会 No.13（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 櫻井悟史
2. 発表標題 「死刑執行人」から死刑制度を考える
3. 学会等名 京都弁護士会勉強会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 番匠健一
2. 発表標題 地域社会からみた「軍事化」 北海道の自衛隊演習場周辺地域のフィールドワークから
3. 学会等名 社会理論動態研究所セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 番匠健一
2. 発表標題 ハンバク（反戦のための万国博）の時代とワークキャンプ運動
3. 学会等名 なら交流の家
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 団地ドラマはユートピアの夢を見るか？ ポーランドのコメディ・ドラマ『オルタナティブ4』を中心に
3. 学会等名 オンライン・シンポジウム「各国映像メディアにおける団地表象の比較研究」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安井大輔
2. 発表標題 オーガニック食品の選択と社会階層
3. 学会等名 第95回日本社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Daisuke Yasui
2. 発表標題 Washoku as Heritage and National Identity
3. 学会等名 Popular Culture as a Japanese National Brand: Possibilities and Challenges (PTJC Webinar Series 2022-2023) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐々木祐
2. 発表標題 就労経験を「流用」する:技能実習生・インターンシップ生を中心に
3. 学会等名 日本人口学会大74回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木村至聖
2. 発表標題 コロナ以後の観光体験に求められるものとは 遺産観光(ヘリテージ・ツーリズム)から考える
3. 学会等名 『地域コンテンツ研究会』No.19(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 櫻井悟史
2. 発表標題 団地・会社・盛り場をめぐる時間的・空間的想像力 山口瞳の社用族批判を手がかりに
3. 学会等名 第5回「時間・空間と想像力」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐野泰之
2. 発表標題 フェミニスト現象学における還元的位置づけ
3. 学会等名 日本現象学会第44回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐野泰之
2. 発表標題 梅田卓夫の文章表現論
3. 学会等名 第5回「時間・空間と想像力」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 炭鉱経験を再考する ポーランド、カトヴィツェ郊外のアマチュア画家グループの考察から
3. 学会等名 日本ロシア文学会・日本スラヴ学研究会共催シンポジウム「記憶と創造の中の祖国・歴史・越境：ロシア・東欧における文化と変容」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 社会主義時代のポーランドの SF 映画 P. シュルキンの ディストピア四部作 を中心に
3. 学会等名 日本スラヴ学研究会オンライン・シンポジウム「スラヴ世界の SF：K. チャベック『ロボット』初演 100 周年によせて」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 自然としてのボタ山：ポーランド、シロンスク地域におけるその意味づけ
3. 学会等名 2021年度日本スラヴ学研究会研究発表会（パネル発表「鉱山の光景」）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木村至聖
2. 発表標題 ヘリテージをめぐるコミュニケーション 「古墳」は文化財なのか？
3. 学会等名 日本社会学会第94回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 番匠健一
2. 発表標題 北海道総合開発と地域社会 根釧パイロットファームの入植者の経験から
3. 学会等名 アメリカ研究所部門研究、Historical Studies of the Transient Subjects/Unsettled Settlers in Japan and North America from the Mid 19th Century to the 20th Century
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐々木祐
2. 発表標題 「移民資本」蓄積過程としての難民経験：メキシコにおける中米移民の事例から
3. 学会等名 日本文化人類学会 第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐野泰之
2. 発表標題 経験を記述すること、世界を作り変えること メルロ＝ポンティの表現論から
3. 学会等名 UTCPシンポジウム「 経験 を見つめ直すための哲学 メルロ＝ポンティと考える身体・他者・言語」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐野泰之, 川崎唯史, 酒井麻依子, 澤田哲生, 宮原優
2. 発表標題 Phenomenology of Perception in Japan: Current Trends and the Future
3. 学会等名 Phenomenology of Perception Around the World: A 75th Anniversary Broadcast Series, International Merleau-Ponty Circle and Chiasmi International
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮原祥
2. 発表標題 ポーランドにおける炭鉱経験の表象 カトヴィツェ市周辺の炭鉱住宅をめぐる
3. 学会等名 2020年度東欧史研究会2月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中壮泰
2. 発表標題 多言語的なガリツィアの文学
3. 学会等名 ガリツィア・ユダヤ博物館巡回展記念「記憶の跡をたどって」ミニレクチャー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中壮泰
2. 発表標題 東方ユダヤ人の文学：ベルゲルソンからロートへ
3. 学会等名 日本比較文学会・関西支部例会1月シンポジウム「多言語使用の比較文学：ペルシア語・スワヒリ語・イディッシュ語から見る翻訳の諸相」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tasuku Sasaki
2. 発表標題 Being Migrant/Refugee as a Process of Accumulation of "Migrant Capital": The Case of Central American Migrants in Mexico
3. 学会等名 Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) 2020 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 服部徹也
2. 発表標題 ユートピアの掌握 『Atomic Heart』 (2023) を中心に
3. 学会等名 第6回「時間・空間と想像力」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 番匠健一
2. 発表標題 冷戦下の境界とユートピア 北海道東部における文学・農民運動・コミュニケーション
3. 学会等名 第6回「時間・空間と想像力」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中壮泰
2. 発表標題 居留民の文学 1920年代の東欧とドイツを中心に
3. 学会等名 第1回「時間・空間と想像力」研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金瑛
2. 発表標題 集合的記憶論と空間論の接点 アルヴァックスを中心に
3. 学会等名 第2回「時間・空間と想像力」研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村至聖
2. 発表標題 古墳のトボスの多面性とヘリテージ
3. 学会等名 第4回「時間・空間と想像力」研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計18件

1. 著者名 ヤヌシュ・コルチャク著、田中壮泰、菅原祥、佐々木ボグナ監訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 コルチャク ゲッター日記	

1. 著者名 キャロル・ギリガン著、小西真理子・田中壮泰・小田切建太郎訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 260
3. 書名 抵抗への参加 フェミニストのケアの倫理	

1. 著者名 池上甲一、斎藤博嗣編著、安井大輔他著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 農村漁村文化協会	5. 総ページ数 144
3. 書名 ほんとうのグローバリゼーションってなに? 地球の未来への羅針盤	

1. 著者名 ロドニー・ハリソン著, 木村至聖・田中英資・平井健文・森嶋俊行・山本理佳訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 文化遺産(ヘリテージ)といかに向き合うのか 「対話的モデル」から考える持続可能な未来	

1. 著者名 環境社会学会編、木村至聖他分担執筆	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 742
3. 書名 環境社会学事典	

1. 著者名 神田孝治他編、木村至聖他分担執筆	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 226
3. 書名 移動時代のツーリズム	

1. 著者名 滋賀県立大学地域共生論運営委員会編、櫻井悟史ほか分担執筆	4. 発行年 2024年
2. 出版社 サンライズ出版	5. 総ページ数 170
3. 書名 改訂新版 地域共生論 300人規模のアクティブラーニング	

1. 著者名 稲原美苗他編著、佐野泰之他著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 フェミニスト現象学：経験が響きあう場所へ	

1. 著者名 神戸大学人文学研究科（編）、樋口大祐、佐々木祐（ほか）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 神戸大学出版会	5. 総ページ数 248
3. 書名 人文学を解き放つ	

1. 著者名 木村至聖	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 歴史と理論からの社会学入門	

1. 著者名 秋原 広道, 佐野 泰之, 杉谷 和哉, 須田 智晴, 谷川 嘉浩, 真鍋 公希, 三升 寛人	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 290
3. 書名 京大発 専門分野の越え方: 対話から生まれる学際探求』	

1. 著者名 足立芳宏編著、伊藤淳史、名和洋人、番匠健一ほか著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 470
3. 書名 農業開発の現代史 冷戦下のテクノロジー・辺境地・ジェンダー	

1. 著者名 CHRISTIAN COTTON, ANDREW M. WINTERS, HEATHER BROWNING, WALTER VEIT, NATHAN VISSER, ADAM BARKMAN, SANO YASUYUKI et al.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Open Universe	5. 総ページ数 232
3. 書名 Neon Genesis Evangelion and Philosophy: That Syncing Feeling: That Syncing Feeling	

1. 著者名 滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科(編著)、亀井若菜、金宇大、市川秀之、中井均、高木純一、櫻井悟史、萩原和、石川慎治、横田祥子、東幸代、京樂真帆子、木村可奈子、佐藤亜聖、塚本礼仁	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 187
3. 書名 歴史家の案内する滋賀	

1. 著者名 田中雅一、嶺崎寛子、佐々木祐 ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 448
3. 書名 ジェンダー暴力の文化人類学	

1. 著者名 松田 素二、佐々木祐ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 286
3. 書名 集合的創造性：コンヴィヴィアルな人間学のために	

1. 著者名 松田素二、野村明宏、阿部利洋、井戸聡、大野哲也、松浦雄介、佐々木祐、安井大輔 ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山代印刷株式会社出版部	5. 総ページ数 372
3. 書名 日常実践の社会人間学 都市・抵抗・共同性	

1. 著者名 木村至聖、森久聡、菅原祥、ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 216
3. 書名 社会学で読み解く文化遺産	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木村 至聖  (Kimura Shisei)  (50611224)	甲南女子大学・人間科学部・准教授    (34507)	
研究分担者	番匠 健一  (Bansho Kenichi)  (50770252)	特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員    (95401)	
研究分担者	田中 壮泰  (Tanaka Moriyasu)  (70736529)	立命館大学・文学部・授業担当講師    (34315)	
研究分担者	佐野 泰之  (Sano Yasuyuki)  (70808857)	立命館大学・文学部・授業担当講師    (34315)	
研究分担者	服部 徹也  (Hattori Tetsuya)  (80823228)	東洋大学・文学部・准教授    (32663)	
研究分担者	佐々木 祐  (Sasaki Tasuku)  (90528960)	神戸大学・人文学研究科・准教授    (14501)	
研究分担者	櫻井 悟史  (Sakurai Satoshi)  (90706673)	滋賀県立大学・人間文化学部・准教授    (24201)	
研究分担者	安井 大輔  (Yasui Daisuke)  (90722348)	立命館大学・食マネジメント学部・准教授    (34315)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	金 瑛  (Kin Ei)	関西大学・社会学部・非常勤講師	
研究協力者	島 大吾  (Shima Daigo)	京都産業大学・全学共通教育センター・実学英语講師	
研究協力者	阿部 友香  (Abe Yuka)	佐久大学・人間福祉学部・講師	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------